

国語

〔共通問題〕

〔一〕 次の「汚穢（汚いことや穢れていること）」に関する文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「汚穢」というものを言葉にするよう求められたとき、私が経路として手掛かりにする事柄はいくつか考えられるが、今回は、自分が関心をもつて考察を続けている一つのトピックに絡めて、通常は「汚穢」として認識されなさそうだが「汚穢」という言葉でしか語り得ないように思われる事柄について記してみよう。

たとえば、ネット上での言い争いを目にしたとき、互いに譲らぬ人たちの言説の中に、「潔癖」を感じることがよくある。そうした人たちは、途中で見解を違え（た）るといっても、言葉を交わし合うその初手から、相手のことを自分に対して（ア）へダたりある者だとみなしているように見える。あたかも、互いに相手を「汚穢」とみなし、自身への侵入を必死に拒んでいるかのようだ。そしてまた、そうしたやりとりのありよう（言葉遣い、相手を排撃する応答のステップ、自陣とみなすものへのフォロワーの作法）は、話者の立場や性質を問わず、見事なまでに定型化されているように思える。参加している顔ぶれもトピックも時期も違っているのに、そこにはどこか既視感がある。その意味で、互いに相手を「汚穢」とみなすそうしただり込めの手口は、かえって奇妙なまでに「清潔」で、淀みや濁り、汚れや穢れの気配（別の言い方をすれば、「ためらい」）がない。その様子は、汚染防止の完全防御服の着脱の順序と留意点が完全にマニュアル化され、それを（イ）ゲンカクに遵守することで「汚穢」を自身から完全に締め出し除去する、という作法に重なるように見える。そこでは、「汚穢」を遮断するにとどまらず、その遮断のプロセスそのものが「汚穢」とは無縁の「清潔」を湛（た）えている。その徹底ぶりに「潔癖」を感じるのかもしれない。

さて、私たちは通常、どちらかと言えば、正義を（ウ）コトサラに掲げる者の方に「潔癖」を見出しがちである。正義のヒーローは悪党に向かって、「許さぬ」と（エ）カッパする。汚く穢れた悪党を（ハ）祓い清めるのが正義の鉄槌、という（ア）ングルで描かれた物語はジャンルを問わず（ア）枚挙に暇がない。いわゆる勧善懲悪ものに（ビ）溜飲を下げつつも、そこに「潔癖」の匂ぎつける者は少なくないだろう。それとは反転した構図で、正義のヒーローとされていた者が実は悪に手を染めており、その「偽善」を暴き出す類の物語もあるが、これもまた、正義を掲げる者には一点の「汚穢」も許さないという「潔癖」に（ケン）引かれている。事程左様に、私たちが日常的に接する正義の語りにはこの種の「潔癖」がべったりと付き纏っているため、それとは異なる視座から正義を論ずる可能性は、どうにも私たちの視界に入りにくいらしい。たとえば、ある場所にいるある人が、自分の暮らす集団や社会のなかでそれなりに尊重されながら、自分を取り巻く様々な人たちと何とか折り合いをつけて生きている様子を淡々と描き出す物語もまた、実は正義の物語たりうるのだが、なかなかそうはみなされない。

正義論、つまり正義を論ずるとは元来、まったく異なるバックグラウンドとスタンドポイントをもつ者たちが、共存するための共通のプラッ

トフォームを見つげようと様々な仕方でも渡りを付ける試みそのものに他ならない。それは、もともとデコボコなものでもなるべくデコボコなままで共に在らしめんとするための当座の共通の物差しを探し当てる作業なので、その行程は入り組み、ザラつき、一筋縄ではいかない。前に進んだり後ろに下がったりしながら、落とし所を見極めていく粘り強さが、正義論には求められる。正義を論ずるといふ面倒事を前に、さっさと片付けてしまいたい堪え性のない人も、早々に諦めてしまいたい無思考に傾きがちな人も、どちらも我が身を「清潔」にしておきたいという気持ち強くもっているという点では同じである。換言すれば、彼らは思い通りにならぬ「汚穢」から距離を取ろうと躍起になっている。こうした人たちは、^①実は正義を論ずることからは程遠いところにいる。正義を論ずるとは、「汚穢」から自身を遠ざけることではなく、拭い去り難き「汚穢」とじっくり付き合っていくことだからだ。言うなれば、アンパンマンがアンパンチを繰り出すところではなく、アンパンチを食らわされてもおお、Aにこそ、正義を論ずる足場がある。

こうしたことを考えるうえで最も適しているトピックとして、内部告発を考えてみるとよいだろう。内部告発とは、ある組織の中に人知れず生じていた不正があることをその組織の外に向かって開示する行為のことである。不正が黙認されることを拒み、時に社会へのジンダイな被害を未然に防ぐことにもつながる内部告発は、細かいことを気にせずストレートに考えれば、組織の中の不正という「汚穢」を取り除いて当該組織を「清潔」なものとする^②「正義」の行為だと考えられるだろう。しかし、実際に内部告発が行われると、多くの場合、その組織の中で内部告発を行った人物こそがむしろ「汚穢」とみなされてしまう。時に病理化し、時に職務怠慢と称して、組織の「清潔」を保つよう細心の注意が払われながら、「汚穢」（＝内部告発者）が組織の中からできるだけ「きれいに」^③消えてなくなるよう丁寧に、丁寧に働きかける。その働きかけは、組織の「清潔」が保たれるように、B「清潔」でなければならぬ。そうした組織の力学がそこで露わになる。他方、この力学の中で、内部告発者は、己に降りかかる「汚穢」の眼差しを振り払うかの如く、時に自ら組織を去り、時に自ら命を絶ち、時に孤高の闘いを続ける。内部告発が行われると、そこで本来直視されるべき不正という「汚穢」を上書きするように組織内に内部告発者という「汚穢」が認知され、そこに^④対して「潔癖」に駆動された様々な対応が生ずる、と言ってよいかもしれない。

^④そもそも内部告発者が「汚穢」とみなされるのは、内部告発によって開示されるのが、組織の中で人知れず生じていた不正だからだ。不正というのは誰しも抱えたくないものであり、自分からはなるべく遠ざけたいものであるはずなのに、人知れず生じて継続的に黙認されることが少なくとも可能になっているからこそ、内部告発が行われる。ということは、そこにある不正は「汚穢」であつても、その「汚穢」が組織の中に存在し続けていること自体は組織の「清潔」を破綻させていないということである。その状態が一定期間保たれると、^⑤皮肉にも、その「汚穢」を取り除くことの方が、組織の「清潔」を破綻させる要因になるというわけだ。そして、それを実行した者も組織にとつての「汚穢」となる。こうした事態は通常、「組織に対する裏切り」や「組織への忠誠心の欠如」として捉えられるが、そこには、同調圧や集団主義といったことでは語り尽くせない何かがあるように思われる。つまり、公益通報者保護法などで内部告発者をどれほど法的に保護しようとも、内部告発者の苦

悩(そして、時に、それ以外の組織の成員の苦悩)がなくならないのは、そこに同調圧や集団主義とは区別されうる端的な「汚穢」と「潔癖」の契機が介在しているからではないか、ということである。

さらに一歩進んで考えてみよう。多くの場合、内部告発を受けた組織が保たんとする「清潔」は、その組織が根を張る社会では不正と認定されるものであり、その社会の中では「汚穢」とみなされるので、組織の中でも(少なくとも表向きは)「汚穢」とみなされることになり、最終的に保持されることはない。そうすることで、社会の「清潔」が保持される。これは、組織の中で人知れず生じた不正が、社会の不正と一致している場合であり、その場合、内部告発者は、社会から「汚穢」を取り除き社会の「清潔」を保つことに貢献した者として表向きは讃えられる。表向きは、というのは、そうした内部告発者の位置づけは、内部告発をすることで一度組織の中の「汚穢」となった後にしかなされ得ないため、組織にとって内部告発者が「汚穢」であったという事実は組織の中に残り続けるからである。どれほど明白な不正を対象としても、内部告発という行為を介した以上は、それを為した者は「汚穢」から逃れることはできない。

では、組織の中で人知れず生じたものが、社会における現行主流の規範に照らして不正とは言えないが、それに接した者にとっては紛れもなく不正だと思われる、という場合はどうだろうか。この場合、内部告発に踏み切った者は、「汚穢」ならざるものを「汚穢」と言い立て組織と社会の「清潔」を穢すものとして「潔癖」的駆除の対象になるだろう。実際、誰かの名誉を失墜させるべく怪文書がばら撒かれるような事態は、その一例である。そうした行為に及んだ者は、虚妄を述べ立てる異常者として「汚穢」の扱いを受けるにちがいない。しかし、この者が告発した事柄は、現行主流の規範とは異なる規範に照らせば不正であり、そうした規範がやがて主流となる、という場合はどうだろうか。たとえば、様々なマイノリティの権利侵害は、昨今徐々にそれを不正とみなす規範が共有され始めてきたが、一昔前までは長らく不正とはみなされてこなかった。ただし、こうした物言いは後知恵によるものであることに注意しなければならない。一昔前にマイノリティの権利侵害を訴えた者は、その時点で、上記の如く異常者として「汚穢」の扱いを受けてきただろうし、社会の「潔癖」的駆除の対象になってきたであろう。そして、そのまま当時主流の規範が現在に至るまで延々と保持されることもあり得ただろう。まったく同じ構造のなかで、現在「汚穢」ならざるものを「汚穢」と言い立てたことで「汚穢」として「潔癖」的駆除の対象となっている者は、今ここにも、少なからず存在しているだろう。⑦ そうだとすれば、正義を論ずるうえで私たちが目を向けるべきは、現行主流の規範のなかでの「清潔」ではなく、できることなら自分から遠ざけたい「汚穢」の方ではないのか。

このように考えてみると、「清濁併せ呑む」という言葉の含蓄は存外に深い。この言葉が示す態度は、安直に引き受ければ、それが意味するところとは裏腹に、それ自身が自身の「清潔」を保つための口実にすぎないものともなる。正味の意味で「清濁併せ呑む」ことは、そう容易なことではない。おそらくは、ここまで考えてきたような「汚穢」に目を向ける理路を踏まえて正義を論ずること、すなわち、まったく異なるバックグラウンドとスタンスポイントをもつ者たちが、共在するための共通のプラットフォームを見つけようと様々な仕方で渡りを付ける試みに

⑧着手すること初めて、正味の意味で「清濁併せ呑む」実践が可能となる。
清濁併せ呑む。それは、「汚穢」を介して、正義を論ずることと繋がっている。

(奥田太郎「濁る——清濁併せ呑む」による。小見出しは省略した)

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナで表記された語句と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解
答番号は 1 5。

(ア) ヘダたり

1

- ① 勉強のあとのおやつはカクベツだ
- ② 城のガイカクを守る
- ③ 二人の間に埋めがたいカクシツが生じる
- ④ 昔を思うとカクセイの感がある
- ⑤ 会社の乗っ取りをカクサクする

(イ) ゲンカク

2

- ① カイゲン令がしかれる
- ② サイゲンなく続く道
- ③ ゲンキヨウを連絡する
- ④ ゲンシヨの地球の姿
- ⑤ トウゲンキヨウのような場所

(ウ) コトサラ

3

- ① 新体制にイコウする
- ② 上級裁判所にコウコクする
- ③ 契約をコウシンする
- ④ 景気回復のチヨウコウがみられる
- ⑤ 事件がジコウをむかえる

(エ) カツバ

4

- ① 人々の間にハモンを起こす
- ② 中途ハンパな状態にある
- ③ ハブりのよい生活
- ④ ハデな服装
- ⑤ ハカクの値段

(オ) ジンダイ

5

- ① 一網ダジンにする
- ② コウジンの至り
- ③ 盤石のフジンとなる
- ④ ジンジョウでない雨量
- ⑤ ジンギにもとる行為

問二 傍線部 (a) (b) (c) の語句の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。

解答番号は 6 8。

(a) 枚挙に暇がない

6

- ① 数えることに飽きてしまう
- ② 沢山ありすぎていちいち数え切れない
- ③ 色々取り上げても結局一つに集約される
- ④ 多くの人が指摘している
- ⑤ 隙間がないほど多く取り上げられている

(b) 溜飲を下げつつも

7

- ① 緊張感が高まりつつも
- ② 不安がなくなり安心しつつも
- ③ 気分をすっきりさせつつも
- ④ 道徳心をかき立てられつつも
- ⑤ わだかまりを解消させつつも

(c) 一筋縄ではいかない

8

- ① 志だけで何とかなるものではない
- ② 合理的な方法では意図通りにならない
- ③ 滞りなく事が進むわけではない
- ④ 通常の方法ではうまくいかない
- ⑤ 新しいやり方で解決できるものではない

問三 傍線部①「実は正義を論ずることからは程遠いところにいる」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 9。

- ① 正義というのは前に進んだり後ろに下がったり「汚穢」との距離の落とし所を見極める過程の中で生じるものであり、初めから「汚穢」と距離を取ろうとするとその過程のないままに正義を論じることになるから。
- ② いくら「清潔」な状態の正義を追究しようとしても「汚穢」は簡単に拭い去れないものであり、元来の意味での正義を論じようとするためには「汚穢」から途方もなく長い距離を取る必要があるから。
- ③ そもそも正義において重要なのは「汚穢」との距離の取り方ではなく共通の物差しがあるかどうかであり、その物差しについて考慮せずに「汚穢」との距離の問題として正義を論じても本質的な議論にはならないから。
- ④ まったく異なるバックグラウンドとスタンドポイントを持つ者たちが試行錯誤する中に正義が存在するのであり、我が身を「清潔」に保ちたいという意識を持つものが正義を論じてもそこに正義は存在しないから。
- ⑤ 正義とは「汚穢」の状況がある中でいかにその「汚穢」と付き合っていくか試行錯誤する中に存在するものであり、そもそも「汚穢」から距離を取った状態で正義について論じることなどできないから。

問四 「アンパンマン」が正義のヒーロー、「ばいきんまん」が悪党だという前提に立ったとき、空欄 A に入る語句として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 10。

- ① ばいきんまんがああから消滅させられていないところ
- ② ばいきんまんがアンパンマンのパンチを受けて負け続けるところ
- ③ ばいきんまんが自ら置かれた状況を好転させようとするところ
- ④ ばいきんまんが自身の役割を理解してその役割を完遂し続けるところ
- ⑤ ばいきんまんがアンパンマンのパンチを止めようとするところ

問五 傍線部②「正義」の行為について、「正義」にカギ括弧が付けられている理由としてどのようなことが考えられるか。その理由として考えられるものを、次の中から二つ選び、番号で答えなさい。ただし、解答順は問わない。解答番号は ・ 。

- ① 「汚穢」と対比し「汚穢」がすっかり取り除かれるということを強調するため。
- ② 実際に内部告発が行われたときには逆の認識になることを強調するため。
- ③ 内部告発をした人の所属する組織内の多くの人が支持する行為であることを強調するため。
- ④ その行為がなされることによる社会的な影響が大きいことを強調するため。
- ⑤ 一般的には「正義」ととらえられるということを強調するため。
- ⑥ 唯一の「正義」のあり方だと筆者が考えているということを強調するため。

問六 空欄 に入る四字熟語として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 竜頭蛇尾
- ② 朝三暮四
- ③ 率先垂範
- ④ 徹頭徹尾
- ⑤ 明鏡止水

問七 傍線部③「そうした組織の力学」とあるが、「力学」について辞書で調べたところ、次の【辞書の意味】が出てきた。この辞書の意味を本文に適用したときどのようなことが言えるか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は14。

【辞書の意味】

力学……組織や集団などで、状況の変化により新たなつり合いを求めて働く力。

〔精選版 日本国語大辞典〕より

- ① 辞書の「状況の変化」とは、内部告発者ができるだけきれいに消えてなくなるよう組織内の人が組織に働きかけることにあたり、「新たなつり合いを求めて働く力」とは、本来直視されるべき不正という「汚穢」を隠蔽するために組織内に内部告発者という「汚穢」を作りあげて表すと考えられる。
- ② 辞書の「状況の変化」とは、内部告発者が「汚穢」に仕立て上げられることにあたり、「新たなつり合いを求めて働く力」とは、時には自ら組織を去り、時には自らの命を絶ち、時には孤高の闘いを続けることで、内部告発者が己の「汚職」の眼差しを振り払おうとすることを表すと考えられる。
- ③ 辞書の「状況の変化」とは、組織の中に人知れず生じていた不正が内部的に「汚穢」と認定されることにあたり、「新たなつり合いを求めて働く力」とは、内部から内部告発者が「汚穢」と認定されたことをうけて、認定された内部告発者が様々な方法で孤高の闘いを続けることを表すと考えられる。
- ④ 辞書の「状況の変化」とは、内部告発によって組織内の「清潔」が保たれなくなることにあたり、「新たなつり合いを求めて働く力」とは、内部告発者を「汚穢」に仕立て上げその内部告発者を組織から排除することで本来の「汚穢」を表面化させずに組織内の「清潔」を保つことを表すと考えられる。
- ⑤ 辞書の「状況の変化」とは、時には自ら組織を去り、時には自らの命を絶ち、時には孤高の闘いを続けることで、内部告発者が己の「汚職」の眼差しを振り払おうとすることにあたり、「新たなつり合いを求めて働く力」とは、「潔癖」に駆動された組織内でのあらゆる対応を表すと考えられる。

問八 傍線部④「そもそも内部告発者が「汚穢」とみなされるのは、内部告発によって開示されるのが、組織の中で人知れず生じていた不正だからだ。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 15。

- ① 「組織に対する裏切り」や「組織への忠誠心の欠如」が伴うことによって組織にとつての「汚穢」となることを踏まえたとき、内部告発という行為そのものには必ずそのような要素が伴っているものだから。
- ② 誰もが「汚穢」を自分からなるべく遠ざけたいと思っっているのであり、実際に内部告発によって組織の「清潔」が破綻した後も、内部告発者以外の人は「汚穢」から自分を遠ざけたいと考えるから。
- ③ 組織の中でほとんどだれも知らない不正である場合、その知らない多くの人にとって組織自体は「清潔」であると認識され、組織を乱す内部告発者こそが「清潔」を乱す「汚穢」だと判断されるから。
- ④ 内部告発者によって開示される不正そのものには、「組織に対する裏切り」や「組織への忠誠心の欠如」といった「汚穢」となる要素が含まれておらず、「汚穢」の対象が見失われてしまうことがあるから。
- ⑤ 公益通報者保護法などで内部告発者が法的に保護されたとしても、組織の「清潔」を乱した内部告発者に対して一定の距離を保ちたいという人々の気持ちは変わらないと思われるから。

問九 傍線部⑤「皮肉にも」とあるが、どういう点を「皮肉」と表現しているのか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 16。

- ① 本来であれば内部告発者は法的に保護されるはずであるが、その法律があることによってかえって周囲から「組織に対する裏切り」や「組織への忠誠心の欠如」を問題視され、組織から排除されてしまう点。
- ② 本来であれば内部通告は組織の「清潔」を保とうとするための試みであるはずだが、その行為によって人知れずして黙認されていた「汚穢」が表面化し、結果として組織が「清潔」でない状態になってしまう点。
- ③ 本来であれば内部通告によって組織内の「汚穢」がなくなるはずであるが、黙認されていた「汚穢」が表面化することで組織内の人々が「汚穢」を認識し、「汚穢」と距離を遠ざけられなくなってしまった点。
- ④ 本来であれば内部通告によって組織の「清潔」が保たれるはずだが、かえって黙認されていた組織内の「汚穢」が表面化してしまい、その結果として組織内にいるすべての人が「汚穢」の状態になってしまう点。
- ⑤ 本来であれば内部通告者も組織内の「清潔」な人間の一人であるはずが、人知れず継続的に黙認していた不正を表面化させたことによって、周囲からこの人物こそが「汚穢」であると決めつけられてしまう点。

問十 傍線部⑥「汚穢」と「潔癖」の契機」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 17。

- ① 「汚穢」の意識化と「潔癖」でない状態の一定期間の継続が、不正を黙認しようとする意識が生じる引き金となること。
- ② 同調圧や集団主義では語り尽くせない何かがある、人々の心理が「汚穢」を排除し「潔癖」を求めようとする端緒となること。
- ③ 黙認されていた不正が表面化することが、組織内の「清潔」の破綻した状態が一定期間続く端緒となること。
- ④ 内部告発という行為そのものが、同調圧や集団主義と「汚穢」や「潔癖」との差を明確にしようとする動機となること。
- ⑤ 表面化していない不正を告発することが、新たな「汚穢」の出現や「潔癖」の方向に向かうきっかけとなること。

問十一 本文中の点線〔 〕で囲まれた部分ではどのような考察がなされているか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 18。

- ① 内部告発された出来事が組織内あるいは社会から不正と見なされているかどうかによって、内部告発者の告発後の行動がどう変わるか、その違いについて考察がなされている。
- ② 内部告発者が不正の告発に際してどのような行動をとったかによって、その告発内容自体と内部告発者とを社会や組織がどのように扱うか、その違いについて考察がなされている。
- ③ 内部告発された出来事を組織や社会それぞれが不正とみなしているかどうかによって、内部告発者がどのような扱いを組織や社会から受けるのか、その違いについて考察がなされている。
- ④ 内部告発された出来事の性質やその時の社会や組織の状態によって、その時の出来事を告発した内部告発者や周囲の人のうちの誰が駆除対象になるか、その違いについて考察がなされている。
- ⑤ 内部告発者が不正を告発した際に社会や組織内がどのように振る舞うかによって、社会における現行主流の規範の内容がどのように変わるか、その違いについて考察がなされている。

問十二 傍線部⑦「そうだとすれば、正義を論ずるうえで私たちが目を向けるべきは、現行主流の規範のなかでの「清潔」ではなく、できることなら自分から遠ざけたい「汚穢」の方ではないのか。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 19。

- ① 現行主流の規範のなかでその事象が「汚穢」と判断されて且つそれを言い立てた人も「汚穢」と捉えられた場合には、その規範による「清潔」という判断がしばらく維持され続ける可能性があるから。
- ② 現行主流の規範において「汚穢」と捉えられ私たちができれば潜在的に遠ざけたいと思っっているような事象の中には、実は現行主流の規範のなかでは「清潔」の範囲に入ると判断される場合があるから。
- ③ 現行主流の規範においては「清潔」と判断されるが将来的には「汚穢」と判断が変更されるような事象の中には、「汚穢」と言い立てた者こそが「汚穢」であるに過ぎないと判断される場合があるから。
- ④ 現行主流の規範に基づくと不正と見なされず、「汚穢」と言い立てた者こそが「汚穢」と捉えられるような事象の中には、将来的にその事象が不正であり「汚穢」と判断される場合があるから。
- ⑤ 現行主流の規範で「清潔」と判断されるような事象が将来的に「汚穢」と判断された場合、「汚穢」と言い立てた者こそが「汚穢」だという判断が延々と保持されてしまう可能性があるから。

問十三 傍線部⑧「清濁併せ呑む。それは、「汚穢」を介して、正義を論ずることと繋がっている。」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 20。

- ① 時代に応じて何が「汚穢」と判断されるのかということや、時代に応じて何が「清潔」と判断されるのかということを検証することによって、時代に応じた正義の在り方について考えることに繋がるということ。
- ② どのような仕組みによって「汚穢」が成立するのかということや、「清潔」とはどのような仕組みによって成立するのかということや、正義の構成要素を捉えることに繋がるということ。
- ③ 「汚穢」から目を背けずに、「汚穢」がどのように成り立っているのかということや、その「汚穢」は現在あるいは将来不正たるものなのかということや、正義とは何かということや、それを考えられるということ。
- ④ 「汚穢」と「清潔」との間にはどのような違いがあるのかということや、その両者には共通する点があるのかということや、両者が共存する正義は成り立つのか判断することに繋がるということ。
- ⑤ 安易に「清潔」を保とうとする態度の根源にはどのような考えがあるのかということや、人々がなぜ「汚穢」を避けようとするのかということや、何が正義なのか判断することに繋がるということ。

〔選択問題〕〈現代文〉か〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕〈現代文〉次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

理想の型は、和歌・連歌・俳諧においては、本意と呼ばれます。本意とは、景物や人間の本质、もつとも価値ある状態、理想的な姿を言います。自然についても、ありのままを写実するのではなく、その姿が最も理想的な輝きを見せる状態を本意と言ひ、そこをとらえるのが文学や芸術なのです。しかも、個人が定めるのではなく、集団で形成し、共有する美意識です。

例えば、季節です。季節によって、感情が決まると言われたら、いかがですか？ そんなことは人それぞれだというのが、現代人の発想でしょう。しかし、古典文学の時代は違います。例えば、秋は A 季節というのが本意です。人によっては、秋になると気持ちが B という方もいるでしょう。でも、これはお約束なのです。そして、 C から秋がきらいなのではなく、思う存分 D ことができるからこそ、秋はすばらしい季節なのです。

木の間より漏り来る月の影見れば心尽くしの秋は来にけり

〔『古今和歌集』秋上・一八四・読み人知らず〕

（木の間から漏れてくる月の光を見ると、物思いをし尽くす秋がやってきたのだなあ）

この歌は一見 E ように見えますが、「思う存分悲しみを尽くすことができる秋がやってきた！」と F のです。

さらに、秋という季節の中で、どの時間帯が最も美しいかについても共通のイメージがありました。藤原清輔と後鳥羽院の歌を引いてみましょう。

薄霧の籬まがきの花の朝じめり秋は夕べと誰か言ひけむ

〔『新古今和歌集』秋上・三四〇・藤原清輔〕

（薄霧がたちこめる籬の花が朝しっとりとして湿っている。秋は夕べが一番いいなどと、一体誰が言ったのだろう。秋の朝もすばらしいではないか）

見わたせば山本霞かすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ

〔『新古今和歌集』春上・三六・後鳥羽院〕

（見渡すと山の麓は霞んで、水無瀬川が流れている。夕べは秋が一番いいなどと、どうして思っていたのだろう。春の夕べもすばらしい）

ではないか)

清輔の「秋は夕べ」、後鳥羽院の「夕べは秋」は何を指しているのでしょうか。それは、御存じ、『枕草子』です。

秋は夕暮れ。夕日の差して山の端いと近うなりたるに、鳥からすの寝所へ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁かりなどの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。 (『枕草子』)

(秋は夕暮れがすばらしい。夕日が差して山の端にとても近くなっているときに、鳥がねぐらへ帰ろうとして、三羽四羽、二羽三羽と飛び急いで帰る様子もしみじみと心打たれる。ましてや雁などが列をなして飛んでいるのが、たいへん小さく見えるのは、とても趣がある。すつかり日が沈みきって、風の音や虫の鳴く音などが聞こえてくるのも、また言うまでもなくすばらしい。)

現代の私たちの季節感にも通じる、すばらしい描写です。清輔も後鳥羽院も、この規定を本意として踏まえたうえで、「いやいや、そうは言っても、秋の朝、春の夕べだつてなかなかすばらしいではないか」と小さく異を唱えているのです。

本意は名所にも及びます。和歌に用いられる名所を歌枕と呼びます。それぞれの歌枕では、「フォトジェニック(写真映え)」が重視され、その土地を輝かせる定番の景物や意味がセットになっていました。例えば、山城国やましろのくに(京都府)の「小倉山おぐらやま」は紅葉、陸奥むらち(東北)の「塩竈しおがま」は煙・霞かすみというように。

どうしてそういうお約束ができたのでしょうか。それは、歌枕ごとに異なる事情があり、一様ではありません。例えば、宇治うじ(京都府)は、霧深く **G** というイメージが本意です。その背景には、「宇治」が「憂し」の掛詞として詠まれるようになったという事情があるでしょう。

忘らるる身をうち橋の中絶えて人もかよはぬ年ぞ経へにける (『古今和歌集』恋五・八二五・読み人知らず)

(忘れられてしまう我が身をつらいと思つうちに、宇治橋が絶えるように、二人の仲も絶えて、あの人を通わなくなつてから年月がたつてしまった)

つまり、音のつながりによるもので、実際に宇治が「憂し(つらい)」かどうかは関係ありません。だから、喜撰きせん法師は、

わが庵いはは都たつみの辰巳たつみしかぞ住む世をうち山と人はいふなり (『百人一首』八番・喜撰法師)

(私の庵は、都の南東にあつて、このように心静かに住んでいる。それなのに、世を憂きものと思つて住む宇治山と、人は言っているぞうだ)

とうそぶいたのです。

また、「末の松山」(宮城県)は、波が必ずといってよいほど詠み込まれます。その理由は次の一首にあります。

君をおきてあだし心を我が持たば末の松山波も越えなむ

(『古今和歌集』東歌・陸奥歌・一〇九三)

(あなたをさしおいて浮気心をもし私を持ったならば、末の松山を波も越えてしまふでしょう)

この一首の影響が大きく、後世まで末の松山といえ、波や波が越す風景、浮気心が詠まれるようになっていくのです。

(中略)

本意は、自然や人間の営みの理想的なあり方、規範と深く関わっていました。集団が共有する美意識とでも言いましょうか。雑多で混沌とした自然や人事を秩序だて、抽象化しようとする営み、これが本意なのです。そして、和歌や俳諧といった文学作品にとどまらず、人間の現実社会の行動規範と相互に深く関わっており、作品世界の理想と現実世界の理想に区別がなく、一つの方向性を示していたことを物語っています。人はこのような型をどうやって身につけ、理想に近づいてゆくのでしょうか。それはやはりモデル、規範を見て、学ぶこと(2)から始まります。和歌でいうと、『古今和歌集』や『堀河百首』といった歌集が典型的な規範ですが、何も歌書に限りません。藤原俊成は、『六百番歌合』の判詞(注)で、歌人はすべからく『源氏物語』を読むべきと教えています。

源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり。

(『六百番歌合』・枯野・一三番判詞)

(『源氏物語』を読まない歌人は残念なことである。)

もちろん、俊成のことは優れた和歌を詠むための教えですが、当時の人々にとっての『源氏物語』は和歌を詠むための素材を超える意味がありました。例えば、建礼門院右京大夫です。彼女は『源氏物語』の注釈書を書いた世尊寺伊行を父に持っていたこともあり、幼い頃から愛読

していたと思われます。恋人平資盛が壇ノ浦で戦死した知らせを受けた後、彼からもらった手紙を仕立て直し、写経供養を行うことを決意します。この場面で、はつきりと『源氏物語』に言及しています。

見るもかひなしとかや、源氏の物語にある事、思ひ出でらるるも、なにの心ありてとつれなくおほゆ。 (『建礼門院右京大夫集』一二二八)

(見ても仕方ないとか、源氏物語にあることを思い出されるのも、何のつもりでと我ながら未練がましく思われる。)

最愛の女性紫の上に先立たれた光源氏が、彼女の筆跡の残るものを全て焼いてしまったこと(幻巻)を思い出し、光源氏に比べて自分はなんとまあ未練がましいことよと自省しているのです。物語中の架空の人物光源氏と自分を同列に並べて比べています。

また、『建礼門院右京大夫集』を⁽⁴⁾読んでみると、ある種の既視感を覚えることがあります。作者が実家に帰っていた頃、雪の朝突然資盛が訪ねてくるといふ、うれしい出来事がありました。その場面を引いてみましょう。

雪の深くつもりたりし朝、里にて荒れたる庭を見出だして、「けふこん人を」とながめつつ、うす柳のきぬ、紅梅のうすぎぬなど着てゐたりしに、枯野の織物の狩衣、蘇芳のきぬ、紫の織物の指貫着て、ただ引き上げて入りきたりし人のおもかげ、わがありさまには似ず、いとなまめかしく見えしなど、つねは忘れ難くおぼえて、年月多つもりぬれど、心には近きもかへすがへすむつかし。

年月の積もりはてもそのをりの雪の朝はなほぞ恋しき (『建礼門院右京大夫集』一一四)

(雪が深く積もった早朝、実家で荒れた庭を邸の中から見て、今日来てくれる人がいたらうれしいと眺めつつ、薄柳の衣、紅梅の薄衣などを着て座っていましたら、枯野の織物の狩衣、蘇芳の衣、紫の織物の指貫を着て、ちよつと裾を引き上げて入ってきたあの方の面影が、私の有様には似ず、とても優美に見えたことなどが、常に忘れがたく思われて、年月が多く積もったけれども、心の中では昨日のように近く思えるのもかえすがえすいやになってしまふ。

年月が積もりきつてもあのとときの雪の朝が今も恋しい)

この描写、『源氏物語』浮舟巻の、匂宮が宇治の浮舟を訪ねる場面によく似ています。

京には、友待つばかり消え残りたる雪、山深く入るままにやや降り埋みたり。常よりもわりなき稀の細道を分けたまふほど、御供の人も泣きぬばかり恐ろしうわづらはしきことをさへ思ふ。しるべの内記は、式部少輔なむ兼ねたりける、いづ方もいづ方も、ことごとしかるべき

官ながら、いとつきづきしく、引き上げなどしたる姿もをかしかりけり。かしこには、おはせむとありつれど、かかる雪には、とうちとけたるに、夜更けて右近に消息したり。あさましう、あはれと君も思へり。(この後匂宮は浮舟を船に乗せ、隠れ家に連れて行く。)

(『源氏物語』浮舟巻)

(京では、友待ち顔で消え残っている雪も、山深く入って行くにつれてだんだんと深く積もって道を埋めていた。常にもまして難儀な、人影も稀な細道を分け入って行きなされるので、お供の人も泣き出したいほど恐ろしく厄介なことが起こるのではとまで心配する。道案内役の内記は、式部少輔を兼官していたが、どちらの官も重々しくしていなければならぬ役職であるのに、雪にふさわしく、指貫の裾を引き上げたりしている姿も風情があつた。宇治では、宮がいらつしゃるといふ知らせはあつたが、このような雪ではまさかいらつしゃるまいと気を許していたところに、夜が更けてから右近に宮が到着されたことを伝えた。まあ、驚いた、うれしいと、女君も心うたれた。)

深い雪が降り積もつた朝、恋人がわざわざ自分に会いに来てくれたとき、建礼門院右京大夫はどんなにかうれしかったことでしょう。そして、自分を浮舟に、恋人資盛を匂宮に重ねて、幸福な記憶を何度も反芻はんすうしていたのです。

建礼門院右京大夫のように、『源氏物語』の登場人物に自分を重ねつつ、新たな文学作品を生み出していく行為の背景には、『源氏物語』やその作中人物への深い愛情、敬意が存在しています。さらに言えば、光源氏や女君たちを架空の存在と認識しつつも、そこに理想の人物像、恋愛の理想を見出みいだしていたのではないのでしょうか。

こうしたことは、現代人にもよくあることです。『エースをねらえ!』というアニメが流行はやったときにはテニス人口が増加したと言いますし、ヨーロッパ映画に憧れて留学したり、板前を主人公にしたドラマ『前略おふくろ様』にほれ込んで料理の世界に入ったたりした人の話も見聞します。虚構の世界にきらめくような理想を思い描く人々は昔も今もいるのです。

(谷知子『古典のすすめ』による。なお、見出しなど一本文を省略した)

(注1) 判詞……歌合うたあわせなどで歌の勝敗の判定をする判者が、その勝敗の理由などを述べたことば。

問一 空欄 A) F に入ることばの組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は

21。

- | | | | | | | |
|---|-----------------|------------------|-------------|-------------|-----------|----------|
| ① | A 物悲しい思いの湧きおこる | — | B 寂しくなる | — | C 物悲しい | |
| | — | D 悲しむ | — | E 喜んでいる | — | F 悲しんでいる |
| ② | A 満たされない思いの拭えない | — | B さわやかになる | — | C 満たされない | |
| | — | D 未来に希望を抱く | — | E 苦しんでいる | — | F 喜んでいる |
| ③ | A 所在ない思いがついてまわる | — | B ほっとする | — | C さみしい | |
| | — | D 孤独を楽しむ | — | E 退屈している | — | F 喜んでいる |
| ④ | A 悲しい思いをかみしめる | — | B 明るくなる | — | C 悲しい | |
| | — | D 悲しむ | — | E 悲しんでいる | — | F 喜んでいる |
| ⑤ | A 恋煩いでぼうっとなる | — | B 閉じこもりたくなる | — | C 片思いをする | |
| | — | D 気持ちの揺れを楽しむ | — | E 苦悩している | — | F 悲しんでいる |
| ⑥ | A 期待に胸をふくらませる | — | B 沈みこむ | — | C まだ実りがない | |
| | — | D これから実りがあると考ええる | — | E 感慨にふけっている | — | F 悲しんでいる |

問二 傍線部(1)「小さく異を唱えている」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 『枕草子』を愛読している読者の多さにはばかって、表立ってその意見に反対することはできないが、小さなグループの中では自説を主張しているということ。
- ② おおむね『枕草子』の描く季節のすばらしさには共感するが、新しい時代の新しい季節感を求めて少しずつ表現の革新を進めているということ。
- ③ 『枕草子』の描く秋の趣をよく理解した上で、その文章の表現を熟考し、表現の細かな部分において違和感があるという見解を表明しているということ。
- ④ 総じて『枕草子』が築き上げた古典的な季節感を評価してはいるが、散文と和歌との小さな違いがあることを重視し、和歌独自の趣を追究しているということ。
- ⑤ 『枕草子』をはじめとする先行の文学作品の季節感には大枠としては賛同し、その型を楽しんだ上で、少し違う意見を言って新味を模索しているということ。

問三 空欄 に入る語句として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 冬は雪氷にとざされた土地
- ② 俗界を超越した土地
- ③ 日没が早い土地
- ④ 憂いに満ちた土地
- ⑤ 日常のつらさを忘れる土地

問四 傍線部(2)「モデル、規範を見て、学ぶ」とあるが、そのような学びの例として、本文の内容に照らして合致しないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 24。

- ① 『古今和歌集』の春の歌によって春とはどのような花の咲く季節であるかを把握し、知らない花の名前を知る。
- ② 『古今和歌集』の冬の歌にどのような景物が詠まれているかを見て、冬という季節の典型的なイメージを把握する。
- ③ 『源氏物語』の紫の上が光源氏をめぐる人々の中でどのように身を処しているかを見て、貴人の妻のふるまい方として記憶する。
- ④ 『源氏物語』の故人をしのお場面を読んで、知人の亡くなった折、遺族の人々に詠み贈る和歌の表現に取り入れる。
- ⑤ 『堀河百首』の恋歌が片思いのつらさをどのように詠んでいるかを見て、自分が恋い慕う相手に思いを伝える際のことばを探す。
- ⑥ 『堀河百首』の別れの歌がどのような人物との別れに際して詠まれているかを見て、自分が和歌を贈る相手を選ぶ。

問五 傍線部(3)「和歌を詠むための素材を超える意味」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 25。

- ① 『源氏物語』は多数の和歌を含むために歌人たちの表現の規範とされたというだけでなく、その登場人物の生き方は虚構の文学作品ではあるものの個性豊かで魅力に富んでおり、歴史上の人物たちの生き方と同様に価値のあるものにとらえられていたということ。
- ② 『源氏物語』は早くに藤原俊成によって歌人ならば読むべき作品とされていた上に、一般の人々にとっても古典中の古典として最も有名な作品であったため、それを読んだことがない者は教養に欠ける者として生涯恥ずかしい思いをしたということ。
- ③ 『源氏物語』の趣深い自然や人事の表現は和歌を詠む上でさまざまな材料を提供するものであるだけでなく、虚構の物語であるからこそ理想の人間や理想の季節の姿が現れており、現実世界をどのようにとらえるべきかを学びとることができたということ。
- ④ 『源氏物語』の和歌は歌人たちがまず知るべき古典的な位置づけにあったが、それ以上にその和歌がどのような文脈において詠まれたかを知る必要があり、物語をその全体として把握しなければならぬとされていたということ。
- ⑤ 『源氏物語』は和歌の表現だけでなく散文の表現も名作としてのすばらしい質があるものにとらえられており、歌人のみでなく一般の人々も自分自身がどのように生きるべきかを学ぶことができる文学作品として位置付けられていたということ。

問六 傍線部(4)「ある種の既視感を覚えることがあります」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 26。

- ① 『建礼門院右京大夫集』を読んでいると、筆者がかつて体験した冬の思い出がこの歌集の内容に重なるように思われることがあり、自分の過去の思い出かと錯覚するということ。
- ② 『建礼門院右京大夫集』を読んでいると、父世尊寺伊行とともに数々の文学作品を学んだ建礼門院右京大夫ならではの、古典文学作品の表現に通じるすばらしい表現があるということ。
- ③ 『建礼門院右京大夫集』の描く春夏秋冬の景色には『古今和歌集』や『堀河百首』などの有名な古典文学作品に学んだところがあり、理想の型に関する読者の期待を裏切らないということ。
- ④ 『建礼門院右京大夫集』を読んでいると、『源氏物語』等の古典文学作品で読んだことのあるような場面がしばしば描かれており、美しさを感じさせるが二番煎じに思われるということ。
- ⑤ 『建礼門院右京大夫集』の表現には『源氏物語』の具体的な場面や作中人物の描写を思い出させるところがあり、『源氏物語』の世界を重ねてみたくあるときがあるということ。

〔二〕「古文」 次の文章は、中世の演劇である能『俊寛』の脚本の一部である。これを読み、後の問いに答えなさい。

平安末期の僧・俊寛僧都は、クーデターの計画が露見し、丹波少将成経、平判官康頼とともに薩摩国鬼界が島へ流罪となった。そこへ非常の大赦（臨時特別の赦免）によって都から赦免使が到着するが、赦免状には成経・康頼の二人の名ばかりが記されていた。俊寛が、自身のみ島へ残されることを知った場面が、以下の部分である。なお、へ～内に登場人物の舞台上での動きを付記した。

（俊寛） こはいかに罪も同じ罪、配所も同じ配所、非常も同じ大赦なるに、⁽¹⁾一人誓ひの網に洩れて、沈み果てなむ事はいかに。〈赦免状を折り畳んで右手に持ち、左手で涙を押さえる〉

（俊寛） このほどは三人一所にありつるだに、さも恐ろしく凄まじき、荒磯島にただ一人、離れて海士の捨て草の、波の藻屑の寄る辺もなく、あられむものかあさましや。歎かひもなきさの千鳥、なくばかりなるありさまかな。〈涙を押さえる〉

（地謡）^(注1) 時を感じては、花も涙を濺ぎ、別れを恨みては、鳥も心を動かせり。もとよりもこの鳥は、鬼界が島と聞くなれば、鬼ある所に、今生よりの冥途なり。⁽²⁾たとひいかなる鬼なりと、このあはれなどか知らざらむ。天地を動かし、鬼神も感をなすなるも、

人のあはれなるものを。この島の鳥獣も、鳴くはわれを訪ふやらむ。

（俊寛） せめて思ひのあまりにや、

（地謡） 先に読みたる巻物を、また引き開き同じ跡を、〈赦免状をひろげ見返し〉繰り返し繰り返し、見れども見れども、ただ成経康頼

と、書きたるその名ばかりなり。もしも礼紙にやあるらむと、巻き返して見れども、〈赦免状を裏返して見まわし〉僧都とも俊寛とも、書ける文字はさらになし。⁽³⁾こは夢か、さても夢ならば、覚めよ覚めよとうつつなき、俊寛がありさまを、〈右手で膝を

たたいて立ち、前へ出、両手を打ち合わせ、赦免状を捨て〉見るこそ A。〈両手で涙を押さえる。成経が赦免状を拾う〉
時刻移りて叶ふまじ、成経康頼二人ははや、お舟に召され候へとよ。

（成経・康頼）⁽⁴⁾ かくてあるべきことならねば、〈立って舟へ行きかける〉よその歎きを振り捨てて、二人は舟に乗らむとす。

（能『俊寛』による）

（注1）地謡……能における斉唱隊。登場人物の心情や、場面の状況を謡う役割を担う。

（注2）礼紙……書状の文言を書いた紙に、重ねて添える白紙。

問一 傍線部(1)「一人誓ひの網に洩れて、沈み果てなむ事はいかに」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 27。

- ① 一人だけ仏の救いから洩れて、すっかり沈んでしまおうとするのは、どうであろうか。
- ② 一人だけ仏の救いから洩れて、すっかり沈んでほしいと思うのは、いったいどうしたことか。
- ③ 一人だけ仏の救いから洩れて、すっかり沈んでしまいたいと思うのは、いったいどうしたことか。
- ④ 一人だけ仏の救いから洩れて、すっかり沈んでしまいたいそうなのは、いったいどうしたことか。
- ⑤ 一人だけ仏の救いから洩れて、すっかり沈んでしまうのは、どうであろうか。

問二 傍線部(2)「たとひいかなる鬼なりと、このあはれなどか知らざらむ。」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 28。

- ① たとえば、どのような鬼であろうとも、この哀れさを知らないであろう。
- ② たとえば、どのような鬼であろうとも、この風情を知らないであろうか。
- ③ たとえ、どのような鬼であっても、この哀れさをどうして知らないことがあるか。
- ④ たとえ、どのような鬼であっても、この風情を知らないことであろう。
- ⑤ たとえ、どのような鬼であっても、この哀れさを知らないのはなぜであろうか。

問三 傍線部(3)「これは夢か、さても夢ならば、覚めよ覚めよとうつつなき、俊寛がありさま」とあるが、この部分の俊寛の様子として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 「怖い夢か。夢ならば、どうか覚めてほしい」という、現実にはあり得ないほどの恐怖におびえる様子。
- ② 「怖い夢か。しかし夢ならば、覚めてしまえばよい」という、現実にはあり得ないことを期待する様子。
- ③ 「これは夢か。しかし夢ならば、覚めてしまえばよい」という、現実にはあり得ないことを期待する様子。
- ④ 「これは夢か。夢ならば、どうか覚めてほしい」という、手を打ちつつ泣くほどの悲しみに沈んでいる様子。
- ⑤ 「これは夢か。夢ならば、どうか覚めてほしい」という、正気を失うほど取り乱して悲しんでいる様子。

問四 空欄 に入る、文法的に最も適切な表現を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① あはれなりける
- ② あはれなれけれ
- ③ あはれなりけれ
- ④ あはれなれけれ
- ⑤ あはれなるけれ

問五 傍線部(4)「かくてあるべきことならねば」とは、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① このようなことは、あるはずのないことなので。
- ② いつまでもこうしてはられないので。
- ③ 書き残す方法が、あるわけではないので。
- ④ 書き残す人が、あるわけではないので。
- ⑤ このようなことは、めったにないことなので。

問六 本文の場面の説明として適切でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 鬼界が島へ流罪となった三人のうち、二人が赦免され迎えの船に乗ろうとする場面。
- ② 鬼界が島へ流罪となった三人のうち、俊寛だけが罪を許されずに悲しみに沈む場面。
- ③ 鬼界が島へ流罪となった三人のうち、成経・康頼の二人だけを赦免使が船に乗せようとする場面。
- ④ 鬼界が島へ流罪となった三人のうち、成経・康頼の二人が俊寛の赦免を願う場面。
- ⑤ 鬼界が島へ流罪となった三人のうち、俊寛が何度も繰り返し赦免状を読み返す場面。

問七 能『俊寛』は、ある文学作品に取材しているが、それは何か。次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 伊勢物語
- ② 源氏物語
- ③ 平家物語
- ④ 大和物語
- ⑤ 平中物語